

るかどうかということ、作業中に捨てるべき不適切物がどうなるかという運命を検討することとなる。

本年度は、科学研究費をもらって、自由再生法の下での記憶に関し、「系列位置の終末項は短期間で再生できなくなる」という現象を記憶範囲との関連から検討する実験（口心34回発表）をしたり、対連合学習下に単に弁別学習モデルや連合モデルでは説明のつかない項目の統合に関する研究（教心11回発表）をしたりして、記憶研究から行為、行動に関する研究をおこなおうとしてきた。

この研究は未発表、未整理のデータを含めてこんど検討を深め、S. T. M. 研究と言語行動、言語学習と呼ばれている領域の諸問題との関連から検討を加えたいと思っている。

本年度はその他「児童心理学の進歩」に「学習」の領域をまとめる機会を得たり、**Learning by Discovery**の一部を翻訳させてもらったりして、自分の研究の児童心理学や学習心理学の中にしめる位置を知り、発見的行動や概念形成とのかかわりをほりさげることができた。

以上のように、記憶行動の研究を特殊な記憶法を通じて検討してきたのであるが、将来の研究としては次の三点からせまりたいと思っている。(1)データ解析法の開発、(2)実験技術の新たな工夫、(3)課題解決、言語行動とのかかわり。

#### (1)データ解析法の開発

弁別学習モデルでの弁別性は情報理論的にも刺激検出論的にも説明できることが明らかとなった（東海心理学会月例会発表）ので、弁別モデルから立てられる行動予測モデルと実測値の関係を検討し、実測値とモデルのずれを単に **Error** 部分とたたづけることなく、解析していく方向を考えている。

#### (2)実験技術の新たな工夫

項目の呈示法を工夫したり、項目の呈示時間を変えたり、再生と呈示の間隔を正確にとりだす技術を開発して、その技術を使って、**running Memory span** の研究や **clustering** の研究で明らかとされてきた諸事実を定位し、基礎的データををつみあげて、実験がモデルによってゆがめられないようつとめたい。

#### (3)課題解決、言語行動一般とのかかわり

課題解決に関しては、弁別や同定 (**identification**) からなる概念達成は対連合学習と対応があることを明らかにできたが、対連合学習やその他の棒暗記学習法の中にも概念形成の一般理論を確立していく道があるようにおもわれる。

また言語行動の研究に関しては、**Osgood** の内包的意味には個人内に判断の中があり、**scale** 上の一点にはのらないのではないかという視点から、松原（大同工大）と共に検討を加えている段階であるが、その研究を通じて、言語行動一般と記憶行動の関連を考察していく新たな道がひらけると考えている。

## 今年の研究活動について

蔭 山 英 順

常に私の研究活動は、臨床心理実践と切りはなして考える事はできない。むしろ、臨床心理実践そのものが研究活動であると考えている。当学部のクリニックにおいては情緒障害児の遊戯療法、母親のカウンセリングが日々の研究活動であった。その実践活動の中で、今年度のまとめる方向で述べていくために主なる三点をあげたい。本来この三点は各々分離しているものでなく、すべて人間の臨床心理学的接近の点で結びつけられているものである。

第一に、昭和44年3月より丸井文男教授をチーフとする「自閉症児の遊戯療法および母親のグループ・カウンセリング」の研究班が編成され、私もメンバーの一人として主に母親の治療を担当してきた。昭和44年度の成果は日本臨床心理学会第5回大会発表抄録にまとめたが、本年度はその成果をふまえて治療を継続してきた。さらに、今年度は自閉症児の治療過程における変化、家庭お

よび学校・幼稚園における対人関係の変化の三側面から「自閉症児の治療過程による類型化の試み」をしてきた。今年度にまとめることのできたのは自閉症児、つまり **client** 自身に関してであるが、それと並行して、我々は母親のグループ・カウンセリングを継続してきた。ここでは母親の変化過程の測定、および自閉症児を持つ母親の治療法としてのグループ・カウンセリングの有効性を検討するために、すべてのテープより逐語録を作製し、分析のための基礎資料を集積してきた。そしてそれをもとに検討を重ねてきた。その検討会から多くの知見を得ることができたが、まとめる段階に至らなかった。

第二に、続有恒教授をチーフとする「過疎地域に関する心理学的研究」の一メンバーとして参加してきた。この研究に参加していった私の動機は、私の臨床心理実践の中で、多くの子供達が、親から見て問題を持った子供として、我々のクリニックに連れてこられるのである

が、その背景にある家族の人間関係の問題を常に私は感じていたからである。家族の内における子供の心理学的位置は変化してきている。それは現在の文化的、社会的、歴史的背景の中で家族とその子供達は存在しており、その背景に最も鋭敏な反応を示している存在が子供達なのだ。そこで、厳しい生活条件の中で、また、家族構成がどんどん変化していつている過疎地域における家族内人間関係、および家族間人間関係の変化の急流の内にいる人々に直接会うことにより、真に人間の動く姿を把握しようという目的で参加していった。グループ全体としては4ヶ所を調査した訳であるが、私は山形県大蔵村と島根県頓原町の調査に参加した。本年度では前述の目的の分析までには至らなかったが、その面接記録を基礎資料としてまとめるにとどまった。(詳細は本紀要参照)

第三には、村上英治助教授をチーフとする「重度精神薄弱児への人間学的接近」の研究班に参加し、昭和45年8月21日から25日までの5日間、愛知県心身障害者コロニーはるひ台学園において、重度精神薄弱児とのとりくみを行なった。ここでの体験は、遊戯療法における基本的な人間と人間の出会いにおける体験過程、特に言語を持たない生物学的存在に近い我々の仲間である彼等の内

に、人間的存在を発見でき、そこにある人間学的意味を見ることができたという、貴重な体験であった。(詳細は本紀要参照)

以上、臨床心理実践の展開の中で主なるものを述べてきた。これらの活動のまとめが決して研究成果と評価しているのではなく、その活動を通して、私自身の C.P. としての成長が少しでもあったことを自から評価し、意味あるものと考えている。その点で、日本臨床心理学会第5回大会より問いかげられた C.P. への基本的な責任性、および社会体制と臨床心理実践への問いかげは、本年度の私の研究活動(臨床心理実践)へ重要な影響を与えた事は事実である。とかく、私のように大学にいる C.P. は、温室の草のように社会からの問いかげを受けとめることのできにくい存在であるが、そこから脱皮しようとした一年であった。しかし、反省してみると、まだ本質的なものを見ることができず、私自身の内にその問いかげが十分に統合されたものにはできていなかった。この点は、さらに臨床心理実践(研究活動)を通して展開し、真にクライアントのための臨床心理学を追求していきたいと願うのである。

## この1年の歩み 村上英治

1. 昭和44年4月、14年にわたる教養部生活をはなれて教育学部へうつってきた。4.28声明・見解を契機として、研究者としての私たち大学人の基本的姿勢がきびしくまた重く、問いかげられつづけたこの1年、私は私なりの自己課題として、これらの告発を謙虚にうけとめてきたつもりである。今キャンパスは表面的に冷静にもどっている。この時点においてこそ、私たちは改めて、大学の問題を、学問研究のありかたを、自分自身の歩みをとおして、深く省察しなければならないと考える。

大学改革への歩みはけわしく、またきびしい。全般的な改革への志向を決して忘れることなく、これを具現化するための着実な努力を自らに課するとともに、私は私自身、大学における学生相談室担当の立場からしても、その実践をとおして、大学における教育状況を阻害するものをとらえ、そうした状況にあって疎外されていく人間性に改悛のきざしを与えていきたいと願う。文部省総合研究費「学生の適応異常に関する研究」の分担研究者として、私は、45年1月、蒲郡におけるこの研究班の会合での討議において、こうした観点からの多くの示唆を得たし、これらの体験にもとづく私の基本的な構えは、

第一法規の教育叢書第11巻「教育指導」の中の一章に「大学における教育指導」(印刷中)と題して提起されている。

2. 私は、私自身、Clinical Psychologist (C.P.) としての Identity に立つ。その私にとって、44年10月日本臨床心理学会第5回名古屋大会での問いかげは、大学問題における上記の問いかげ同様、きびしくまた重いものであった。この問いかげは自らに発せられて、今もなお問いかげつづけられている。こうした問いかげに対する私自身のいらえは、45年10月第6回九州大会へ理事会提案として出された「総括と展望」のまえがきのところにくわしい。またあるべき医療臨床のすがたをうたう視点は、愛知県城山精神衛生相談所報第6号('69)に、精神衛生センター設立をめぐる特集の中で、「偶感」として私の見解を提起した。あるべき C.P. とは何か、C.P. として20年の私自身、また何をしてき、何をしてこなかったのか、問題はきわめて重大である。真に「Client のために」と志向する、臨床の本義に立ちもどっての実践を、研究を私は失ってはならない。そしてそれに徹するために、それらの Client がおかれる、さまざまな状